

TOEIC 講座の実践報告および今後の課題

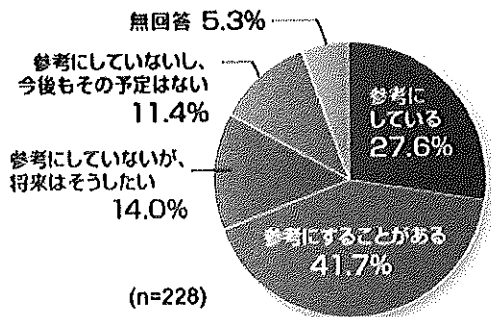
濱 奈々 恵

要約

言語教育センターでは西南学院大学および本センター所属の講師が、正規授業外の取り組みとして語学実習を行っている。今年度に関講したコースは英語、中国語、スペイン語、フランス語、韓国語の5言語で、特定言語の会話講座とは別に、就職活動を前にした TOEIC 講座も開講した。近年、TOEIC のスコアを参考にする企業が増えていく中、一部の学生にとって就職活動と TOEIC のスコアは切り離せないものとなっている。本稿では今年度の TOEIC 講座の内容を振り返り、来年度の講座に活かすためにどのような改善を加えるべきかをまとめた報告である。

1. はじめに

一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) は、全国 228 の企業を対象にアンケート調査を実施した。「採用時に TOEIC スコアを参考にするか」という問いに対して、以下のような解答を得ている。



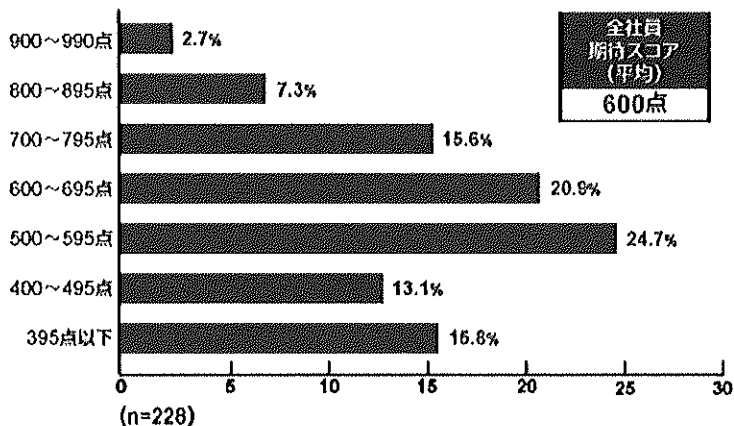
入社時期期待スコア(平均)		
	2011年	2013年
新入社員	550点	565点
中途採用社員	600点	710点

(出典：TOEIC レポート「企業が求める TOEIC スコア—2013」

<https://square.toeic.or.jp/globalbusiness/report/08>)

現段階で TOEIC のスコアを「参考になっている」あるいは「参考にすることがある」と答えたのは全体の 69.3% にのぼっている。ここに「参考にしているが、将来はそうしたい」と解答した企業 (14.0%) を合わせると、その数は 8 割を超える。新入社員に期待する TOEIC スコアは 565 点であり、前回の調査から 15 点上昇している。

同様に、同じ 228 の企業から得られた「グローバル化に伴う業務遂行に必要な TOEIC スコア」の詳細は次の通りである。



※各平均の値を記載しているため、合計100%にはならない。

(出典：TOEIC レポート「企業が求める TOEIC スコア—2013」)

<https://square.toeic.or.jp/globalbusiness/report/08>

最も解答が集中したのが「500～595点」(24.7%)、次いで「600～695点」(20.9%)となっており、「全社員期待スコア」の平均値は600点と算出されている。

「入社時期期待スコア(平均)」は2013年の段階で565点だが、これは年々、上昇傾向にある。また入社すると、今度は「全社員期待スコア(平均)」として600点を突破することが期待されている。この2点から考えると、大学在籍中の目標に「600点突破」を掲げるのは妥当だと考え、学生にもその点を伝えている。

本稿の執筆者は毎年、前期と後期の初回授業にて英語学習や現在のレベルに関する実態調査を行っている。今年度は前期8クラスの267名、後期8クラスの306名、合計573名に対して調査を行った。対象者は経済学科1年、国際経済学科1年、国際文化学科1年、国際関係法学科1年、法学科1年、児童教育学科1年、外国語学科フランス語専攻1年、商学科2年、外国語学科フランス語専攻2年、国際文化学科2年、経済学科2年におよぶ。前期267名中、アンケート実施時にTOEICを受験しスコアを取得していた学生数は22名、後期は306名中58名であった。これらのスコア取得者80名のうち、600点を突破している学生はわずか4名にとどまった。当然ながら、この数値は学年や学部・学科によって大きく変動があることは承知している。だが外国語を教える身としては、就職活動に直結するか否かを別にしても英語運用能力を高める1つのツールとして、TOEICに取り組む学生が増えることを願っている。

2. TOEIC 講座の実践

本学院の言語教育センターに所属する教員は、前期と後期に週2コマずつ正規授業外に語学実習を行っている。本稿の執筆者は「TOEIC 対策初心者コース」と「TOEIC 対策特訓コース」を担当した。使用テキストは『TOEIC テスト新公式問題集 Vol.5』(国際ビジネスコミュニケーション協会、2012年)で、受講生に購入を義務付けた。また適宜、補

足情報を提供するため、副教材として『新 TOEIC テスト「直前」模試 3 回分』（アルク、2007 年）の一部を使用した。各コースの詳細をまとめると以下のようになる。

	コース名	曜・限	時間・回数	定員	応募人数	参加人数	備考
前期	TOEIC 対策初心者	月・4	60分・8回	10名	38名	10名	未受験者および TOEIC 470点未満の学生
	TOEIC 対策 特訓	木・3	60分・8回	10名	3名	3名	TOEIC 470点以上の学生
後期	TOEIC 対策初心者	水・5	50分・8回	15名	40名	15名	未受験者および TOEIC 470点未満の学生
	TOEIC 対策 特訓	月・4	50分・8回	10名	10名	10名	TOEIC 470点以上の学生

前年度同様、今年度もレベル別のコース設定とし、「TOEIC 対策特訓コース」の受講を希望する学生には、TOEIC 470 点を突破していることを証明するスコアシートの提出を義務付けた。

コースは 8 回完結型で、5 月の第 2 週目から始まった。初回に簡単なオリエンテーションを行った後に Part 1 に取り組み、第 2 回目からは各回につき 1 パートずつ、実践と解説を繰り返した。「TOEIC 対策初心者コース」はほとんどの学生が TOEIC 未受験者であるため、試験そのものの概要を知り、慣れることを目標とした。一方、「TOEIC 対策特訓コース」では 600 点突破、あるいはそれ以上のスコアが取れるように、英語力と TOEIC 力の強化を念頭に置いた指導に努めた。どちらのコースにおいても取り組むパートによっては時間の関係上、全ての問題を解くことができない。そのため、まずは各パートの半分を全員で一斉に解き、その後、解答と解説を挟んだ。ただし、使用したテキストにはすでに詳細な解説が載っているため、教員の側からは TOEIC でスコアを伸ばすのに必要なテクニックを提供することとした。Part 1 には「人が写っている写真」と「人が写っていない写真」があること、それに合わせて注目ポイントを変える必要があること。Part 2 は「5 W 1 H 問題」「Yes / No 疑問文」「その他」の 3 種類に大別され、それぞれに「音ワナ」があることなどを説明し、そのテクニックを知った上で時間が許す限りで、残りの問題を解くという方法を繰り返した。Part 7 に関しては使用したテキストだけではカバーしきれない問題パターンがあったため、その場合は『新公式問題集』の Vol. 1 から Vol. 4 あるいは、『TOEIC プラスマガジン』（リント）などから問題を取り、自己学習用に提供した。

3. 反省点と今後の改善点

本稿の執筆者は TOEIC を受験することはあっても、TOEIC を教える経験がなかったため、毎回の実習が手探りの状態であった。実習が終わるたびに翌週の実習に向けて改善を加え、前期が終わると今度は後期でその改善を活かせるように努めた。1 年間にわたって「TOEIC 対策初心者コース」と「TOEIC 対策特訓コース」を担当した結果、改善すべきと判断した内容を 4 点記しておく。

まず 1 点目は各コースの対象者についてである。本実習ではコースの受講対象者をレベル別に分けていたため、定員に対する応募者の数にかなりのバラつきが出た。特に「TOEIC

対策特訓コース」は TOEIC を受験し、470 点というスコアを持っている必要があるため、応募者が初めから限られてしまう。そのため前期はわずか 3 名、後期は 10 名という少ない人数しか応募していない。その一方、前期の「TOEIC 対策初心者コース」には定員 10 名に対して 38 名が応募しており、28 名が受講できなかった。後期は定員を 15 名に増やしたが、40 名の募集があったため 25 名が受講できなかった。そこで来年度からはレベル別のコース設定を廃止し、定員を増やすこととした。そもそも TOEIC は初めて受ける人も何度も受けている人も、スコアが低い人も高い人も、一斉に同じ試験を受ける。また本学院ではこの語学実習を足掛かりにして、TOEIC に挑戦しようと考えている学生が多く、実際、TOEIC 以外の語学実習に参加した学生からも「TOEIC を受けたかった」との声が多く聞かれた。そのため来年度は「TOEIC 対策 1」および「TOEIC 対策 2」とし、各コースの定員を 20 名ずつとすることになった。

2 点目は実習の回数、および各回の時間についてである。当初、各回の実習時間は 60 分と決めていたのだが、前期終了時に実施したアンケートで「60 分は長い」との指摘があった。集中力が途切れて間延びすることがあったため、後期は 50 分に短縮したが、今度は「50 分では短い」との意見が出た。そこで来年度は実習の回数を 1 回増やして再び 60 分とし、TOEIC の実践を 50 分、各自で各回の振り返りをする時間を 10 分取るなどの改善を加えることとした。

3 点目は上記に挙げた「振り返り」と関わるのだが、目標と現状の可視化を徹底する必要性を感じた。というのも前期でも後期でも、受講生を対象にしたアンケートにおいて、「TOEIC の概要がよくわかった」や「目標が達成できてよかった」などの意見が聞かれて安心したもの、実は、受講生それぞれの目標が把握しきれていなかった。そのため就職活動を始める中で企業側から「〇点取ってくるように」と言われた数名の受講生から相談されても、その学生の現状や、得意なパートと不得意なパートを見極めた上でのアドバイスができないことがあった。来年度はレベル別のコース設定を廃止する以上、1 つのコースに様々なレベルの受講生が集まる可能性が高い。そこで各受講生の目標と、その学生の得意・不得意を把握するべく、教員や受講生同士によるモニタリングを取り入れることとした。

4 点目は各回の進め方である。今年度は各回に 1 パートずつ攻略する手法を取っていたため、第 1 回目から第 7 回目までで Part 1 から Part 7 までを極め、第 8 回目にミニテストを実施して総復習をした。受講生からは「1 パートずつ取り組めたのでわかりやすかった」との反応を得られたが、これには 1 つ問題点があった。例えば第 1 回目に Part 1 を極めたとしても、次の回には Part 2 に進み、Part 1 の理解度を試すチャンスがないままとなる。Part 2 を学んだ後も、次週は Part 3 に進むため、やはりまた Part 2 のテクニックを試すきっかけを失ったままとなる。そこで来年度は毎回、「TOEIC ミニミニ模試」と題した模試を解くことに決め、現在、準備を進めている。これは【新 TOEIC 公式問題集】の Vol. 1 から Vol. 6 の中から、毎回 Part 1 を 3 問、Part 2 を 10 問、Part 3 を 6 問、Part 4 を 6 問、Part 5 を 10 問、Part 6 を 3 問、Part 7 を 12 問の合計 50 問を選び、これを 8 セツ

ト用意することとした。第1回目の実習では初めて TOEIC を受ける学生がいることを想定して、「TOEIC ミニミニミニ模試」とした 25 問程度の体験版模試を解き、第2回目から「TOEIC ミニミニミニ模試」を使っていく。そのうえで、各回に1パートずつテクニックを伝授し、それを次の「TOEIC ミニミニミニ模試」で試し、次の回で新たに1パート極めて、次のテストで試すというのを繰り返す。各回の最後には8回分のテスト結果が記入できるシートに各パートのスコアと勉強計画や質問などを書いて提出してもらうことで、受講生は自分の現状とスコアの推移を把握し、教員側でもそれを共有できるようなアプローチを取ることにした。

以上の点を踏まえ、来年度の TOEIC 講座は以下のように決まった。

コース名	曜・限	時間	回数	定員	対象	内容	備考
TOEIC対策1	月・5	60	9	20	全学部、全学年 (経験者、未経験者)	毎回、「ミニミニ模試」(「新TOEIC公式問題集」のVol. 1～Vol. 6の中から抽出した問題(教員作成、7パート50問))を解きながら、TOEICの特徴やスコアアップに必要な学習法、およびテクニックを伝授する。毎回1パートずつ極めていき、コース終了時に全パートのスコアアップにつなげる。(教材と解答・解説などの資料はこちらが用意します。)	600点突破
TOEIC対策2	木・5	60	9	20			

来年度も引き続き、就職活動のために TOEIC のスコアが必要な学生、あるいは英語力診断として TOEIC に取り組む学生などをサポートしていく。様々な動機や目標をもつ学生に対して的確な指導を行い、目標達成の援助ができれば幸いである。